

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第四主日(6/13)礼拝

「立って祈るために」

ルカ福音書第22章39節から第22章46節

【聖書】

ルカによる福音書22:39 イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。40いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。41そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。42「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」[43すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。44イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。]45イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。46イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

1 真実に愛すること

以前牧師として教会に仕えていて、今は引退され後輩の説教者達の育成に心身を注いでいる方が、何かの話の中で「愛することって、想像力だからね。」と言いました。どういう話の流れか、その前後は覚えていないのですが、この言葉だけが記憶に残っています。「本当にそうだ」と強く思ったからです。自分の立場から一步も動かずに、自分の都合で何か言ったりしたりする事は、相手愛する事ではない、相手の置かれている状況を想像する事なしに、人を大切に思う事はできない。子育てなどまさにそうです。赤ちゃんが火のついたように泣いている、おむつなのか、おなかが減っているのか、眠いのか、赤ちゃんの様子から想像してあやしていく。親の愛とは、すごいと思います。

ですが、正しく想像する事は難しい。赤ちゃんと違って成長した一人の人は、自分とは異なる独立した存在。独立した存在を愛するという事は、相手の自由を尊重すること。相手が過ちを犯す自由さえも受け入れる事であるから。過ちは過ちだときちんと指摘し諫めつつも、最終的に相手の自由意志に委ねるしかない。私達は、相手と同一の存在にはなれないのですから。ですから、人として真実に愛するという事は、根本的な悲しみや痛みを自ら負う事ではないか、真実の愛は悲しみを知っているのではないかと思います。

私達が真実に愛する、と言っても、完全に相手の立場に立つ事などできませんし、また、相手にとって正しい判断が出来るものでもありません。私達

は愛するという事において、よく罪を犯します。ですが、主イエスは、この点で私達とは全く異なるお方です。罪を犯した事のないお方、相手のことも相手以上によくご存じ、そのような神と等しい力を持つお方が、いやしかし、一人の人間という制約の中にやって来てくださり、その制約をもって私達人間を愛してくださる、その為に苦しみ悶える事も引き受けられた。オリーブ山の暗がりの中で血の汗を流しひざまずいて祈る姿こそ、まことの人、まことの神、イエス・キリストの在り方が凝縮されているようです。今日は、ゲツセマネの祈りとも言われる、逮捕される直前の有名な場面に豊かに湛えられた主の恵みをルカ福音書を通して見て行きたいと思います。

2 立って祈る

さて、エルサレムに入った後の主イエスは、日中は神殿の境内で人々に教え、夜はエルサレム市外に出て、オリーブ山で過ごされていたようです。エルサレム市内で過越の食事を祝った主イエスと弟子達は、いつものようにオリーブ山のいつも皆で眠る場所へと戻ってきた、とルカは伝えます。おそらくもう真夜中は過ぎていた、現代と違い夜の闇は深かったでしょう。ですが、彼らには何度も通いなれた道、弟子達の中には、のんびりとあくびをする者もいたかもしれません。しかし、この時、イスカリオテのユダが夜陰に乗じて一行の中から抜け出した事に気づく者はいません。主イエスお一人以外は。ユダは祭司長達の所に走って行き、主イエスの居場所を知らせ、彼らに引き渡そうとします。一方、主イエス達は、いつもの通り、いつもの寝場所に戻って来ました。しかし、主の様子がいつもと違います。

主は弟子達に「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われますが、それが主がいつもと違う事でしょうか。この部分、原語のギリシア語を直訳すると、「誘惑に入り込まないように祈り続けなさい」です。この世には、私達を神から引き離そうという様々な誘惑がありますが、そのサタンの誘惑する力について行くか、行かないかは、入り込むか、入るのをやめるのか、それは私達の選択次第。私達は自分で決めて誘惑する者の後について、入り込んで行く。そんな弱さを主イエスのご存じでしたから、弟子達に、私達に「誘惑に入り込まないように祈り続けなさい」とおっしゃったのでしょう。主イエスは以前にも弟子達にそのように教えておられました。

いつもと様子が明らかに異なっていたのは、次の41節です。「そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた」。石をひと投げしたほどの距離、この会堂の端から端ほどまで離れてはいなかったかもしれませんが、主イエスは、弟子達から離れて、一人祈られました。主

が一人祈られるのもまた、珍しい事ではありません。しかし、「ひざまずいて」祈られたというのは、明らかに普段と異なる主のお姿であったでしょう。普段と異なるから、福音書はわざわざ「ひざまずいて」と書いたのだと思います。

というのも、祈ると立つという事には深い関係があるからです。ユダヤの人々の習慣では、神に祈る時には、立って祈ることでした。この習慣はキリストの教会にも引き継がれたようで、少し前までは、ヨーロッパの古いカトリック教会やギリシャ正教・ロシア正教などの礼拝堂には、椅子がないという事が当たり前にあったようです。ミサや礼拝の数時間の間、会衆はずっと立って、司祭たちの祈りにあわせて祈りを捧げ賛美をしていたようです。また、ヨーロッパの敬虔な家庭では、食前食後に祈りを捧げます。家の主人が、食事の前に、又、食べ終わった後に、立ち上がり「祈りを捧げます」と言うと、食卓についている家族全員、おじいちゃん・おばあちゃんから子供まで立ち上がり祈りを献げる、その姿に感動した、と言う話を、ヨーロッパの家庭にホームステイ経験のある年老いた牧師から聞いた事があります。

立って祈る事について、ある人がこう言いました。「立って、目を開いて、天を仰ぎ、声に出して自分の祈りを神に申し述べる。祈りとは、そのように足をしっかりと踏ん張って立ち、誘惑の中に引きずり込まれないように、自分の両足を踏まえながら神に向かって願いをのべ、神の栄光をほめたたえる事だ」と。本当にそうだと思います。肉体的に立つという事ではありません。たとえ座っていても、神との関係においては、神に生かされた一人の存在として神の御前に立って祈る、信仰によって立って祈るという姿勢は、キリスト者として生きる上でとても大切な事だと思います。

さて、そんな立って祈ることが重要である事を誰よりも弁える主イエスが、この夜は、ひざまずいて祈られました。「ひざまずく」とは、「膝を置く」が直訳。立っている事が出来ず、深くくずおれて、父なる神に懇願するイエス様の姿があります。

3 主イエスの苦しみ

主は次のように祈られた、と伝えられています。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」眠り込んでいた筈の弟子達が、眠りの内でも魂の記憶に刻まれるほどの声音であった、祈りであったのでしょう。主イエスは苦しんでおられた。「杯」とは聖書では、神の怒りの裁きを表すシンボルです。杯を受けるとは、神の審きによる滅びを引き受けるということ。

主イエスは、迫りくる十字架、神の裁きに恐れおののいておられる、立ってはいられない程に。「どうか、あなたの裁きを私の前から取り除いてください」とイエス様が父なる神に懇願しておられます。

神の御子なのに、なぜ苦しむ？と私どもは、能天気と思います。私ども人間の仲間でさえ、自分の運命を受け入れて静かに死んでいった偉人や英雄はいます。例えば、有名なギリシアの哲学者ソクラテス。彼は死を恐れるどころか、寧ろ進んで毒の入った杯をあおぎ、穏やかに死を受け入れた、と伝えられています。それなのに、主イエスは神の独り子、神と等しい身分のお方。そのお方が、神の裁きを受けて滅ぼされる事にこれほどに恐れを抱くものなのか、苦しむものなのか。

この事について、改革者ルターは次のように言っています。「主イエスこそ本当に死を恐れた方だ」と言いました。主イエスだけが本当に神に裁かれて滅びる事の怖さを知っていた、だから主イエスのみはその死を正しく恐れることができた、という事だと思います。神の独り子のみが、神と引き離され一人滅びに向かう事の恐怖を真に知る事ができる、神に審かれて滅びる事がどんなに辛い惨めな事であるかを、罪人である私達の誰一人として知らない。ソクラテスだって知らない。彼は自分の罪の故に死なねばならない、自分は罪人の死を死ぬのだという自覚は少なかったと思います。「悪法も法なり」という自分の信念に殉じたのでしょ。罪人の死かどうか、この点において、ヒーローの死と主イエスの死は決定的に違うのです。だから、主イエスの死は、ソクラテスなどの英雄たちの死に比べれば、実にみっともない死です。英雄的な死ではない、罪人の死です。

しかし、なんとも不思議で、考えも及ばない事ですが、罪人の死に、みっともない死に最もふさわしくない方、神の独り子が、そのみっともない死、糞尿にまみれた死、汚辱にまみれた罪人の死を死んでくださろうとしています。神に裁かれて滅びる事のまことの怖さを知るただ一人の人なのに。この時の苦悶は、イエス・キリストしか知る事の出来ない苦しみ悶えでありました。これ以上の孤絶はありません。

冒頭に私は、愛することは相手の立場を想像すること、自分の立場を離れ、相手の立場に立ってみる事ではないか、と申し上げました。そうは言っても人間である私達には限りがあります。完全に相手の立場に立てる筈もありません。ですが、主イエスは違う。主はまさに神の独り子というご自身の罪なき立場を出て、罪人である私達の立場に完全に立ってくださった。罪人である私達が自覚する事ができない、だから立つ事もできない、罪の深い深い淵にまで沈んでくださった。私達がまみれる事の出来ない汚辱にまみれてくださった。まさに神の独り子だからこそできること。だから、この場面の主イ

エスの悶え苦しみは、悲しみは、弟子達への、私達人間への愛ゆえだと言え
ると思います。

そして、主イエスの心に、イスカリオテのユダの姿がある事も間違いない
事ではないかと思えます。神に裁かれて滅びることの真実の恐ろしさを知っ
ている主だからこそ、サタンの誘惑の力に入り込んでしまい、滅びの道を行
くユダへの切なる想いに苦しんでおられたのではないか、自分が神の怒りの
杯を呑まねばユダも、イスラエルの神の民も、神を殺した罪から免れるの
ではないか。主は罪人への愛ゆえに、苦しみ、悶えられていたのではないかと
思えます。

4 勝利を得るために

しかし、かと言って、主イエスは十字架の上に敗北する為に苦しみ悶えら
れたわけではありません。それはこの聖書テキストにもはっきりと描かれて
います。44節「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の
滴るように地面に落ちた。」この「苦しみ悶え」と訳されているギリシア
語を直訳しますと、「イエスの中に苦悶が生まれた」です。

苦悶、というと、どうしようもない苦しみ、その苦しみから自由になれず
息が出来ない、身をよじる事もできない程の苦しみ、心を覆う絶望で窒息死
しそうな苦しみを思い浮かべます。ですが、もともと「苦しみ悶える」と訳
されているギリシア語、アゴニアという単語の語源は、「人が集まる所」
という意味だそうです。やがてその言葉は、スタジアムのような処に人が沢
山集り競技をする場所のこと、古代オリンピックが行われる場所の事を言う
ようになり、更に発展して、競技そのものを指す言葉となったようです。ス
ポーツをしていた方は分かると思いますが、競技に勝ち抜き勝利の栄冠を手
にするために選手たちは、日ごろの非常に厳しい練習を耐えます。本当に息
も絶え絶えに自分の限界を超えるところで訓練しなければ、試合に勝利して
栄冠を手にはできないからです。ですから、アゴニアが苦しみ悶えると訳
される時、それは、勝利を目指して苦しみ悶えるという意味を持つのです。

つまり、この「苦しみ悶え」という言葉から想い起される事は、主イエス
は、ただ運命に負けて絶望の内に苦しんでおられるのではなく、勝つための
闘いを戦っておられるという事です。主は、勝つための苦しみ悶えの中にあ
ります。では、主イエスの勝利とは何なののでしょうか？

甦りの命、永遠の命と言ってよいと思えます。主は、私ども人間の罪に打
ち勝ち、永遠の命を罪人である私どもにもたらしたい、その為の闘いを今こ
こで戦っておられます。それは、「イエスが祈り終わって立ち上がり」とい

う処に描かれています。この「立ち上がり」というのは、十字架の死から三日後の主イエスの復活を表して、「主が甦られた」という時にも使われている単語だからです。主は絶望的な死の中の悶え苦しみを闘って、ここで甦りの命の希望をその手に捉え立ち上がられた、絶望から甦られた、三日目の復活をさきどったと言ってよい静かで力に満ちた主の姿をルカは描いているのだと思います。

5 起きて祈る

主イエスは苦悶の祈りから立ち上がり、弟子達の所に戻ってきました。すると、弟子達が悲しみの果てに眠り込んでいるのを目にします。「悲しみの果てに眠り込む」皆さん、変な話だと思われる方は多いでしょう。通常、嘆き悲しむほどの悩みがあれば、私達は眠れなくなるものです。一晩中、悶々として夜を明かす事が続く、流石に体がまいってしまうので、睡眠導入剤を服用したり、お酒を飲んだりして、感覚を麻痺させて眠りにつく。そういう事の方が多い。ですから、ここでいう「眠り込む」は、肉体的な「眠り」でないことは明らかです。神との関係に対して眠り込む、神さまの事、主イエスの事を考えなくなる、感覚が鈍る、という事です。実際、私達、自分の存在を揺るがすほどの悩みや悲しみに遭遇した時、すぐに天の父なる御神に祈れるでしょうか。混乱してしまい、先ず人間の力に頼ってしまう、自分で何とかしようとする、それが普通ではないでしょうか。弟子達もそうであったでしょう。主イエスの苦しみ悶える姿を正視できず目をそらす、神への感覚を鈍らせてしまう。

だからこそ主イエスは、仰るのです。46節「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」この場面の最初に主が仰った40節「誘惑に陥らぬよう祈っていなさい」とよく似ています。46節も直訳してみれば、「誘惑に入らぬように、起きて祈っていなさい」です。違いは、「起きて」です。「起きる」が46節では付け加わっています。この単語は、45節の主が「立ち上がって」と同じ言葉で、主イエスの復活、甦りを表す言葉です。それと同時に「立つ」という意味もある言葉。ですから主イエスはまるで弟子達に、「誘惑に自ら足を踏み入れる事がないように、私の甦りの力の内にしっかりと立って、祈っていなさい。」と呼びかけておられるようです。

主イエスは、十字架の死を超えて、甦られます。途方もないみともない罪人の死を、最もふさわしくない神の独り子が苦しみ悶え忍耐して、私どもの罪に対する勝利を勝ち取ってくださる、最後は主イエスの愛が、神の愛が

罪に勝利する。その甦りの主の勝利、その中にしっかりと立ち上がれ、足を踏ん張って父なる神に自分の願いを申し述べよ、そうして、父なる神とのまっすぐな関係に生きよ、サタンの力に入り込むのではない、死の道を歩むのではなく、神との関係にしっかりと立って歩め！主はここで弟子達にそうおっしゃっている、そしてこの礼拝を献げる私達にもそう語り掛けておられます。

無論、弟子達が、私達が自分達の力で立って祈れるわけではありません。人を愛する事においても罪を犯す者達です。みな、どこかで人を憎んだり妬んだりそねんだり、その事で苦しむのですが、その苦しみ悩みを徹底する事ができず、安易に誘惑する者の方へ入り込み、神から離れていくもの。私達はそんな自分に望みを置いて、主の甦りの力の内にしっかりと立つ、立ち続ける事などできません。

ですが、いえ、だからこそ、主はひざまずいて祈ってくださった事を心に刻みたく思います。私達が、主が十字架で勝ち取ってくださった永遠の命の内にとしっかりと立って父なる神との関係に生き続ける事ができる為に、ひざまずき、胸つぶれるような思いで祈ってくださった。いや、実際に心も体も引き裂かれてくださる。主イエスが真実にひざまずいて祈ってくださったからこそ、私どもは、神の御前に立って祈ることができます。主は私達が立って祈ることを支えてくださいます。どれほどの恵みでしょうか。

迎える七日の旅路、私達は目ざめていたい、祈り続けたい。そうして、主イエスが私どもと共におられ、私どもの罪を赦し、甦りへと立たしめてくださる事を確信して生き、主イエスを証することができますように、そう願ってやみません。